

「主体〈わたし〉」三考
— 説話と表現 (6) —

竹村 信治
(広島大学)

本稿は、

○「主体〈わたし〉」考「『国語教育研究』第41号、広島大学教育学部光榮会、一九九八年三月」

○「主体〈わたし〉」続考「(同第42号、一九九九年六月)につづく、主体をめぐる考察の第三稿である。

第一稿では、「主体」を、他者との境界で被媒介的継起的に生成している存在性においてとらえたうえで、境界での対他的な「内的体験」をとおりて形成される、こうした「主体〈わたし〉」の諸相を、つぎの三者について概観しておいた。

- ・ 他者あるいはそれが内属する言説を内面化(主体化)しつつ形成される(わたし)
- ・ 他者をまえに、既有的もしくはあらたにであった「他者の言葉」(言説)を賦活あるいは参照・選択しつつ形成される(わたし)
- ・ 他者あるいはそれが内属する言説の外部化をこそ希求するところに形成され、個の居場所を他者の外部にもとめ、単独者としての位置どりの確保に固執しつづける(わたし)

そして第二稿では、さらにいまひとつの(わたし)の肖像として、

・ 他者の内面化と外部化とを両極とする線分上を往還しつつ、また「他者の言葉」(言説)の賦活や選択をためらっている(わたし) — すなわち、他者との境界で、いまだ(わたし)の像をむすべしに境界線上を宙吊りのまま彷徨しているマジナルな「主体」の存在性を、阿部次郎『三太郎の日記』、大杉栄「個人的思索」および芥川龍之介の「鼻」執筆以前の書簡(新版岩波全集第17巻所収分。以下、芥川関連の引用は本全集による。)にうかがっておいた。

以下はその続稿で、「鼻」テキスト形成の間に芥川という個に生成していた(わたし)をいますこし詳細にかたどることで、「主体〈わたし〉」なるものへの理解をふかめようとするものである。

● 「鼻」——自己像をめぐる vanity の物語

「鼻」があつかおうとした gedankeninhalt, begriffsinhalt (概念内容、稿者補)、したがってテキスト形成の間に生成している(わたし)が関心

をよせていた問題領域については(こ)でいう概念内容や問題領域は、「総じて、わたしたちは、歌を作る前に、ある、漠然としたテーマ(概念)や情意をおもいかべつつ、作歌へと入って行く。」(岡井隆『短歌の世界』岩波新書)にみえる「漠然としたテーマ(概念)や情意」ほどの意である)、芥川自身が「自解」(第23巻)や井川(恒藤)恭宛絵葉書(一九一六年三月一日第二、第18巻)のなかで、二点にわたって説明している。そしてその二者は、そこで、

主Ⅱ肉体的欠陥に対するヴァニテ(vanity)虚栄心、稿者補)

従Ⅱ傍観者の利己主義

の関係にあったとのべられている。

おおくの読者が関心をよせた「傍観者の利己主義」が、従(heban)の位置にあつて、主(aupt)たる内容を「支持」し「事件の進行を助成する」とどまるとすれば、いくぶん肩すかしをくった気味がないではない。しかし、草稿(第21巻)において、

○「傍観者の利己主義」の語句がみえない点

○鼻がみじかくなつてのちの周囲の反応(「晒ひ」)にとまどう内供の描写部分に、数回にわたる改稿がある点

○その改稿過程において、内供が周囲の反応にみいだすものが、

・「或意味」(Ⅲ a)

・「殆一点の憐憫さへも動いてゐない(さま)」(Ⅴ a)

・「或種類の敵意」「消極的な敵意」(Ⅵ)

とかきあらためられている点

そして最終的には、この「或種類の敵意」が「或敵意」とかきかえられ、くわえてこれに「傍観者の利己主義」の名があたえられるのだが、

○その名づけが、(手帳1・見開き3)(第23巻)の、「鼻」脱稿の前日

である一月一九日部分、

Fの事を考へる Egoism of the unhappy 一夕方月の下で犬が二匹
ねてゐるのを見る

Artistの病に三つある (i) いゝものの模倣 (ii) 時代による

事 (iii) 人の悪作に対して安心する事 それ以上は病ではない

Artistにとつてである

にみえる「Egoism of the unhappy」や(iii)人の悪作に対して安心する事」にかかわっているとかがえられること

などを確認すれば、やはり「傍観者の利己主義」は、テキストが内包するものではあるが、当初から問題にされようとした概念ではなく、おそらくはテキスト形成の言語過程において、あらためて発見されたものだったとすべきなのであろう。その真意はじゅうぶんにはかりがたいけれども、遺稿のひとつ、前稿でみた『合本三太郎の日記』第式「形影の問答」を想起させる「闇中間答」(第16巻)に

或声 ではお前はエゴイストだ。

僕 僕は生憎エゴイストではない。しかしエゴイストになりたいのだ。

或声 お前は不幸にも近代のエゴ崇拜にかぶれている。

僕 それでこそ僕は近代人だ。

とあるなどをも勘案するならば、「傍観者の利己主義」は、「他者の言葉」(Ⅱ「近代のエゴ」言説)に由来し、「或敵意」の解釈にむけて賦活されたことばといったところなのだろう。

それはともかく、こうして、「傍観者の利己主義」ではなく「肉体的欠陥に対するヴァニテ」こそが、「鼻」テキストにひらかれようとした問題領域だったということになる。

しかし問題は勿論、あまりにもテキストをよく説明するという意味で(

「肉体的欠陥」は内供の鼻に、「ヴァニテ」はテキスト中の「自尊心」に対応する（これまた肩すかしをくわされた感をまぬかれえないこのような *gedankeninhalt*, *begriffsinhalt* が、なぜ芥川によって書かれなければならないならなかったのか、つまり、この「肉体的欠陥」に対するヴァニテ」と芥川の「主体」との接点がどこにあるのかにあらう。

*

芥川という作家が、文学テキストの生成を作家の内的生活にかかわる「ととかんがえていたのは、つぎのことばかりもうかがえる。

我々の魂はをのづから作品に露るることを免れない。

『侏儒の言葉』「創作」、第13巻。初出『文芸春秋』一九二三年

七月号)

完全に自己を告白することは何人にも出来ることではない。同時に又自己を告白せずには如何なる表現も出来るものではない。

(同「告白」、初出『文芸春秋』同年八月号)

はたして、さきの「鼻」テキストへの「自解」の中には、

僕はあの中に書きたくもない僕の弱点を書いてゐる点で、それだけの

貧弱な自信はある

とある。「ここにいう「僕の弱点」こそが「露るる」「我々の魂」、「告白」された「自己」、すなわち本稿の関心に即していえば、芥川の「主体（わたし）」と「鼻」テキストとの接点ということになる。

「僕の弱点」——、しかし、問題になるのは、いうまでもなく、これと *gedankeninhalt*, *begriffsinhalt* 「肉体的欠陥」に対するヴァニテ」との関係である。これについては、「鼻」執筆中の（手帳1・見開き2）一月一五日部分にみえるつぎの記事が、おおきな示唆をあたえるものとして参考になる。

3 Weaknesses in me

i desire for worldly powers

balances cowardly

ii sensuality (好色、稿者補)

iii indolence (怠惰、稿者補)

Don't forget these are my death-enemies!

ここにいう3 Weaknesses の一々を、たとえば一九一五年三月二日井川恭宛書簡中の、

○僕を苦しませるヴァニチーと性欲とイゴイズムとを僕のチャスチファイし得べきものに向上させたい(傍線、引用者。以下同)

あるいは、後年の「河童」(第14巻。初出『改造』一九二七年三号)にかきとめられた、哲学者マツグの「阿呆の言葉」(十一)、

矜誇、愛欲、疑惑——あらゆる罪は三千年來、この三者から発してゐる。同時に又恐らくはあらゆる徳も。

同時に又恐らくはあらゆる徳も。

や、全集書簡篇の諸処にみいだせる自己の怠惰への言及などと対応させて、i の *desire for worldly powers* (世俗的な力への渴望) が「ヴァニチー」*vanity* あるいは「矜誇」にかかわるとみれば、「鼻」テキストの *gedankeninhalt* や *begriffsinhalt* とされる「肉体的欠陥」に対するヴァニテ」、とくに「ヴァニテ」が、テキスト形成時の芥川の「主体（わたし）」にとつても、Weakness 「弱点」としてその関心事であったことが、たしかめられる。

vanity がこのころの芥川の（わたし）において「弱点」として意識されていたことは、「鼻」拙筆後九ヶ月をへた一九一六年一〇月一日の井川恭宛書簡にみえる、つぎの文言にもうかがえることだった。

○君は多くの作品をよむより、ぼくそのものの方がいいやうな事を云つてゐるがそれは君の買ひかぶりだよ。作品に出てゐるやうなぼくの性

格の断面を现实生活では君が見おとしてゐるからだよ 又實際過去に於てはばくもその位の偽善は働きかねない人間だつたからね 働かないと自分が心細くなる人間だつたからね もう一つ云ふと 自分の地金にも人の地金にも毫光をとりまかせていた人間だつたからね

「偽善」「毫光」に vanity を、「働かないと自分が心細くなる人間だつた」に「弱点」としての内省をみるのはそうむづかしいことではあるまい。

内供のとうばかりでなく、芥川の「わたし」のものとしてもあつた vanity。そして、その vanity は、芥川の「わたし」の Weaknesses として「僕を苦しませる」もののひとつでもあつた。「僕の弱点を書いてゐる」という「鼻」は、こうして、「内供の vanity をめぐる物語」であると同時に「芥川の「わたし」の vanity をめぐる物語」、「すなわち、「弱点」として芥川の「わたし」を「苦しませる」vanity をめぐる物語」であつたともいうべく、ここに、テキストの gedankenhalt, beghiffesinhalt 「肉体的欠陥に対するヴァニテ」と芥川という個との接点を指摘することができる。だが、それにしても、この vanity は、どのようにして芥川の「主体（わたし）」がテキストにひらく問題領域となつたのだろうか。いいかえれば、どのようにして芥川の「主体（わたし）」における問題領域、つまり「作る前」の「ある、漠然としたテーマ（概念）や情意」でありえたのだろうか。

*

このことをかんがえるためには、vanity の由来があきらかでないかならない。すなわち、「肉体的欠陥に対するヴァニテ」の「肉体的欠陥」が、芥川の「主体（わたし）」にとつてはどのようなこととしてあつたのか、これについての考察が必要とならう。容易に解明できそうにないそうした課題にとつて、さきにひいた（手帳1・見開き2）一月一五日部分、とり

わけそこで Weaknesses のひとつにとりあげられている desire for worldly powers が vanity に対応すると目される点は、みのがせない。

desire for worldly powers — 世俗的な力への渴望。これに balances (均衡) cowardly (臆病に、卑怯に) がそえられているのは、この desire for worldly powers が他者との関係にかかわるものだからであろう。つまり、自己をとりまく他者たちとの均衡関係 balances をつくりまたさちさえる worldly powers、あるいはまた、臆病さをあわせもつ卑怯さ cowardly をもつて他者に行使される worldly powers、これらの力への渴望が、おそらくこの desire for worldly powers のなかみなのである。この心意は、たしかに vanity 虚栄心や「矜誇」の心意に通じていよう。そして、こうした心意は、今村仁司が新版全集の月報24によせた文章、「欲望する人間」（一九九八年三月）をあわせみれば、いっそうよく理解することができるようにおもふ。今村はそこで、人間の存在を「人間とは欲望する存在である」さらに「人間とは欲望である」と定義し、そうした把握を最初にしめた人物のひとつであるパスカルのことば「すべて世にあるものは、肉の欲、目の欲、生命の誇りである」(『パンセ』ブランショヴィック版、四五八)を紹介しながら、しかしこの三つの欲望は支配的欲望に帰着するとして、つぎのようにのべている。

支配的欲望（「生命の誇り」、稿者補）は他人に対する「誇り」、つまり他人によつて賞賛されたい欲望である。支配とは他人たちの賞賛を獲得しつつ、多数の他人からの賞賛を自分の權威にすら作り変えて他人を服従させることである。官能的欲望（「肉の欲」、同）は孤立した個人のふるまいというよりは、他人の視線の下でのみ激烈になる情熱であり、知識欲（「目の欲」、同）もまた孤独な真理の探究ではなくて、他人の賞賛を獲得するための欲望に引き回されている。パスカルのい

う支配する欲望は、結局は、他人との関係のなかで他人の欲望を自分に振り向けさせる欲望であり、他人の評価を求める欲望である。自分で自分をどれほど高く評価していても、それは主観的確信の域をでない。それを人間は他人の評価で確かめたいという激情をもつし、それは決して完全には充足されることがないし、しばしば否定的評価になりがちであるから、人間はつねに不満と挫折感をもちつつ、いわば永遠に他人の視線を病的なまでに求めて彷徨する。羨望や嫉妬はこれの変形でしかない。(傍線、引用者。以下、同)

今井はこれにつづけて「こういう人間をパスカルは地獄と見たが、芥川龍之介はそれに魅惑されたのではないかと思われる」とのべ、「鼻」にもふれて、さきにもとりあげた「或敵意」(「傍観者の利己主義」)を、「これはまさにパスカルのいう支配的欲望の定義そのものである」と評している。この判断は、「鼻」の問題領域を「傍観者の利己主義」にみる因習にならざるもので、「傍観者」ではなく内供、そして芥川の「主体(わたし)」をこそ問題にしていることでの議論にはほとんどかかわらないが、引用中、「欲望」を「他人との関係」を通じた自己像の「評価」(「所有」)にむけてうごく心意と指摘している点、しかもその「欲望」が充足されずに「つねに不満と挫折感をもちつつ、いわば永遠に他人の視線を病的なまでに求めて彷徨する」人間のあり様に言及しているところは、ここでの考察にとつても重要である。

desire for worldly powers — balances / — cowardly が対他的な関係の局面で生じる「渴望」としてあり、vanity や「矜誇」に通ずる心意でもあったことは、さきにのべた。今井の行論にそってこれをとらえかえせば、それは、自己所有にむけた他者所有(「支配」)の「欲望」にかかわり、これがみだされず、したがって自己も他者もひいては世界像をも獲得できない

まさに「不満や挫折感」をいただき、他者に臆しつつ「他人の視線を病的なまでに求めて彷徨する」主体(わたし)において、生じるものだったということになろう。desire for worldly powers は、このようにして、自己像や世界像の所有への「欲望」のみたされなままなお対他的な自己像の所有を「渴望」して彷徨している(わたし)の相貌をうつつしだす。vanity や「矜誇」は、そうした(わたし)が、他者の「評価」をもとめ、彷徨のさなかに対他的な自己像をとりつくろいつづける、その心意をいうのであろう。まさに、「渴望」そして vanity は「欲望」の未充足に由来する、といったところだが、ここに、「鼻」テキスト形成時における芥川の(わたし)を「苦しませ」た vanity の由来、すなわち「欠陥」の内実もみえていよう。

自己所有にむけた他者所有(「支配」)の「欲望」の未充足が「他人の視線を病的なまでに求め」る「渴望」や vanity の由来であるとすれば、vanity の由来としての名ざされる「欠陥」は「欲望」の未充足にかかわっている。「渴望」や vanity を生じせしめる「不満や挫折感」、これらを惹起する「欲望」の未充足。しかし、その「欲望」の未充足が、自己も他者もひいては世界像をも獲得できない「主体(わたし)」の存在性にかかわる以上、vanity はその存在性にこそ由来しているといわれなければならない。つまり、自己も他者もひいては世界像をも獲得できない存在性を生きる「主体(わたし)」が、そうした存在性のゆえの「欲望」の未充足のために自己像をめぐる「不満や挫折感」をいただき、対他的な自己像の所有をなお「渴望」する、そこに vanity が発現するという次第なのだ。その意味では、「欠陥」の語は「主体(わたし)」の存在性をこそ見とがめたものということになるのだが、この存在性が「鼻」の内供のものでもあることはいまでもない。そしてそれはまた、前稿でとりあげた、「鼻」出来前夜の芥川

においてその生成がみとめられた(わたし)、すなわち、他者との境界で他者の内面化も外部化もままならず、(わたし)の像をむすべないまま宙吊りになっている。主体の存在性、いいかえればマージナルな存在性にも通じている。

「肉体的欠陥に対するヴァニテ」——。あまりにもよく「鼻」の内供の心意を説明する、この *gedankenhalt, begriffsinhalt* は、こうしてみる、と、芥川の(わたし)においても、宙吊りの自己像に対するヴァニテ、もうすこしパラフレーズしていえば、宙吊りの位置にあるマージナルな(わたし)が、そのマージナルな存在性の「欠陥」ゆえに、自己も他者もひいては世界像をも獲得できず、「不満や挫折感」をいだいて対他的な自己像の所有をなお「渴望」しつづける、そこに生じる *vanity* としてたしかにあり、「僕を苦しませる」切実な問題領域を構成していたことが了解されよう。

*

と(ついで)、(ついで)であらためて注意されるのは、さきにひいた(手帳1・見開き2)にあったように、このような *desire for worldly powers — balances / — cowardly* が(わたし)の *Weaknesses* のひとつとみなされている点である。*vanity* の物語たる「鼻」のばあいも、「自解」に「僕はあの中に書きたくもない僕の弱点を書いている」とあるところからすれば、そうした「弱点」としての *vanity* をこそ書こうとしたものごとくなのである。つまり、(ついで)は *vanity* が、そして *desire for worldly powers — balances / — cowardly* が「弱点」として対象化され、相対化され、さらには否定されているのである。

このことは、マージナルな(わたし)の存在性のゆえに対他的な自己像を「渴望」している(わたし)を対象化している、もうひとつの(わたし)

の生成をつたえる。この「主体(わたし)」「生成の履歴を、いまかりに整理してしめせば、つぎのようになる。」

・他者との境界での「肉体的体験」をへて「他者に対して、他者を通じて自己に対して」(パフチン)獲得された、マージナルな(宙吊りの)(わたし)

・宙吊りの位置にあつて、そのマージナルな存在性のゆえに対他的な自己像の所有を「渴望」している(わたし)

・この「渴望」する自己像との境界で、*vanity* にくるしめられている(わたし)を見いだし、それを「弱点」として否定する(わたし)、また、この「弱点」としての *vanity* の由来をみずからのマージナルな存在性にとがめ、その存在性を「欠陥」とよぶ(わたし)

そして「鼻」が、芥川の(わたし)の *desire for worldly powers — balances / — cowardly, vanity* の物語、さらには、芥川の(わたし)が「欠陥」としてのマージナルな存在性ゆえの *desire for worldly powers, vanity* とむきあう物語としてかたりはじめられる。

おもうに、テキストに「肉体的欠陥に対するヴァニテ」を *gedankenhalt, begriffsinhalt* とする内供の物語が語られ、そこに *vanity* をめぐる問題領域がひらかれるのは、*vanity* を「弱点」とみなし、みずからの存在性の「欠陥」を認知してこれらを相対化する、このような(わたし)の生成をえてのことであつたらう。

*

こうして、「鼻」テキストは、「欠陥」(内供の鼻、芥川の(わたし)のマージナルな存在性)のために「たえず *vanity* のなやまされてゐる」(自解)(わたし)が、この *vanity* (対他的な自己像の所有をめぐる「渴望」)の噴出を「弱点」として意識しつつ、その「苦しきを書かうとした」(自

解)とくに出来たというべく、それは「自己像をめぐる vanity の物語」、もしくは「対他的な自己像の所有をめぐる「渴望」|| vanity に苦しむマージナルな(わたし)の、その存在性とのむきあいの物語」とよぶべきものであったのである。前稿で、「鼻」にフォルキユスの娘たちのさがす「眼球」をかきね、内供の「鼻さがし」にフォルキユスの娘たちの絶望的な「眼球」さがし(=自己像)、他者の言葉「さがし」、すなわち「自己の空疎」をみたくすものをもとめて「指の先によだれをつけて心の隅にこもった塵の上にへのものへじを書きつづも(= vanity による対他的な自己像さがし)、これを「遊戯」と観じて(= vanity に翻弄される自己の相対化)絶望のうちに彷徨する三太郎のすがた(『合本三太郎の日記』第老「断片」)をみようとしたのは、これによる。

それについても、こうして三太郎の似せ絵としてある芥川の(わたし)を、今井のように、「欲望する人間」に「魅惑」されたすがたとみるのは、ちよつとむつかしいようにおもいますが、どうだろう。

●「鼻」の(わたし)

さて、「鼻」テキストの出来が、そのおりの芥川に立ち上がっていた、vanity を相対化する(わたし)の生成にかかわるとして、この、宙吊りの位置で対他的な自己像の所有をなお「渴望」する自己のすがたに vanity の惑乱を観じ、これを「弱点」とみなす(わたし)が、さらに vanity そのものにもむきあい、これをテキストの問題領域としていく(=主題化)ところには、また別の(わたし)が生じていたようである。

○僕はすべての Personal study (人間研究、稿者補)はその Gegenstand (対象、同) になる人格の行為とか言辞とかを思想とか感情とかに

reduce (還元・分解、同) する事によつて始まると思ふ。云はゞ外面的事象の内面化だ。その上でそれにある統一を作つて個々の事実を或纏つた有機的なものにむすびつける。その統一を何によつてつくるかがさし当りの問題だが(…中略…)

ある単純な感情の中でさえ vanity は無限にある。まして複雑な情緒をや。固定した名の下に固定した情緒を予想するものはブルジョアにすぎない

人間の性格と周囲とその他百般の事象に Eudity (限定・修正変形、同) される或瞬間と或不可思議な感情よ。情緒よ。それを知る事は学問にも芸術にも出来ない。唯一「生活」するだけだ。唯体験するだけだ。
(一九一五年二月三日 井川恭宛書簡)

これは「鼻」起稿(僕は小説をかき出した)一九一五年一月四日久米正雄宛絵葉書)以後のもので、引用した三段にわたる文言のその第一段には、Personal study への関心とその分析の方法がのべられている。そして第二段では、その Personal study において reduce された感情や情緒に関する観察結果、すなわち感情・情緒生成の間の vanity の作用がしめされ、さらに末段にはこの感情や情緒が生成している現場への内省、すなわち、他者としての自己(「人間の性格」)や他者としての世界(「周囲とその他百般の事象」)によつて madly される様態、本稿の行論に即していいかえれば、おりおり被媒介的に継起的に生成する(わたし)なるものへの洞察がわたられている。「対象になる人格の行為とか言辞とかを思想とか感情とかに還元、分解する」Personal study において見あらわされた、対他的(被媒介的継起的)な感情や情緒 || (わたし) 生成の様態、またその間における無限の vanity の作用。三段をつづりあわせれば、こうした事態がここではのべられていることになる。これらの事態がそのまま「鼻」の内

供にあてはまる点もみのがせないが、このようにして、人間研究の名のもとに vanity の作用や「主体（わたし）」生成の動態が対象化されている点、さらにはそれらが「生活」「体験」をとおしてしか「知る事」のできないことだとして、「生活」「体験」による Personal study 遂行への決意もうかがえる点は、なにより重要であろう。おそらく「鼻」テキスト産出の場は、この人間研究の場としてあり、芥川の（わたし）が虚構空間を内供とともに「生活」「体験」するなかで vanity の作用や「主体（わたし）」生成の動態を「知る」、その舞台として用意されたものとおぼしく、それは前々稿のべておいたテキスト観にも符合している。

右の書簡にはこれにつづけて

殆この手紙をかき出した時には予期しなかったある感激に動かされてこの手紙を完る 大きな風のやうなそれであつた形のある光の箭のやうのものが頭の中を通りぬけたやうな気がする 今まで何だか人が恋しいやうなそれであつて独りでゐたいやうな心もちにひたされながら何かしろ何かしろと云ふ声がかきだされてゐると思つてゐた それが今どこかへ行つてしまつた

としたためられている。ここには、「今まで何だか人が恋しいやうなそれであつて独りでゐたいやうな心もちにひたされながら何かしろ何かしろと云ふ声がかきだされてゐると思つてゐるといつてよいだろう。この（わたし）の位相は、後年、『侏儒の言葉』に、

文を作らんとするものゝ彼自身を恥づるのは罪悪である。彼自身を恥づる心の上には如何なる独創の芽も生へたことはない。（作家）又（

をかきつけた際の、自己像とむきあいつづけようとする（わたし）」と、たぶんひとしい。

ただし、こうした「主体」の生成は、無前提に、いわば神の啓示（ある形のある光の箭のやうのものが頭の中を通りぬけた）として突然おこつたものでは決してない点にも注意をむけておく必要がある。それは、一九一五年八月一日の山本喜誉司宛書簡にみえる、つぎの記述のおしえるところである。

○この頃ロマン・ロランのトルストイをよんで非常に感激した一寸のすきもなく自分の弱点を攻めていつたトルストイの事を考へると便々とかくしてゐるのが勿体ないやうな気さへする トルストイはたへず自分を襲ふ悪徳として賭博癖 色欲 虚栄心の三つをあげてゐるが、その三つを教つた時に彼は現にその各々に耽溺してゐたのである すべてが悪が彼の手では善に生かされる そしてすべての苦痛が彼の心では幸福に生かされる 僕は此頃しみじみトルストイの大いさを思ふ

「ロマン・ロランのトルストイをよんで」というのは、成瀬正一訳『トルストイ』（ロマン・ロラン『トルストイ伝』訳、一九一五年三月、新潮社刊）の分担翻訳にかかわる（これについては森本修『新考・芥川龍之介伝 改訂版』一九七七年四月刊にくわしい。この訳書の印税が、「鼻」掲載の『第四次新思潮』出版の費用にあてられたという。興味ぶかいは、そこにしるされる「一寸のすきもなく自分の弱点（たへず自分を襲ふ悪徳として賭博癖 色欲 虚栄心）を攻めていつたトルストイ」との讃仰の文言。これは、トルストイの文業に、自己を対象とした personal study をみてとつてものだろう。しかも、トルストイがみずからにみた「悪徳」（「弱点」たる「色欲」「虚栄心」は、さきに〈手帳1・見開き2〉や一九二五年三月一二日井川恭宛書簡で確認したように、芥川の（わたし）

においても「弱点」Weaknesses「僕を苦しませる」ものとして自覚されていたことだった。また、後年の『歯車』(第15巻。遺稿。初出『文芸春秋』一九二七年一〇月号)にある。

僕はとうとう机の前を離れ、ベッドの上に転がったまま、トルストイの Polikouka を読みはじめた。この小説の主人公は虚栄心や病的傾向や名譽心の入り交った、複雑な性格の持ち主だった。しかも彼の一生の悲喜劇は多少の修正を加へさへすれば、僕の一生のカリカチュアだった。(二「復讐」)

も参考になろう。さきの引用書簡中には、「すべての苦痛が彼の心では幸福に生かされる。僕は比喩しめじみトルストイの大いさを思ふ」ともあったが、これと、その引用直前の、吉田弥生との一件をめぐって生じた家族との不和に言及しての文言、

○自分の信条とそれに基づく自分の芸術との為にはこんな苦しい目にもつと幾度もあはなければならぬのだと思ふ。しかも僕の生活の方針はまだ確るときまつてゐない。時々僕はかぎりない落莫を感じる

とをあわせみ、また、「鼻」執筆中の一九一五年一月三日井川宛書簡にある、

○この頃毎日戦争と平和をよんでゐる(…中略…)こんなものを書いた奴があるのだと思ふとやりきれない。日本なんぞまだまだ。夏目さんにしてもまだまだだ

あるいは、(手帳1・見開き3)の、「鼻」脱稿直後の一九一六年一月二日部分にみえる、

○成瀬へトルストイを送る

(稿者補、この「トルストイ」はロマン・ロラン「トルストイ伝」のことであろう。とすれば、「鼻」執筆中、該書は芥川のもとにあつ

たことになる)

などをも視野にいれるならば、「鼻」テキスト出来にかかわった「主体(わたし)」は、トルストイを内面化しつつ、トルストイ同様、Personal study の名のもとに自己像とむきあい、「一寸のすきもなく自分の弱点を攻め」ようとする(わたし)として立ちあがっていたものとする(ことができよう。そうした(わたし)の立ちあがり方は、前稿で一九一四年一月二日井川恭宛書簡、一九一五年四月二三日山本喜善司宛書簡に確認した、「鼻」執筆以前の芥川の(わたし)の、「芸術」への「信仰」を生きようとする状態によく符合する。トルストイの「芸術」への「信仰」、そしてトルストイの内面化、主体化。「鼻」テキスト産出の場は、この、トルストイに媒介されて「生活」「体験」を通じた Personal study の遂行者たらんとする「主体(わたし)」の生成をもってこそ成立したのではなかったか。そして、この Personal study の遂行者たる(わたし)の、テキスト空間における「一寸のすきもなく自分の弱点を攻め」る「生活」「体験」によつてこそ、「鼻」は、vanity の作用や「主体」生成の動態を「知る」場となり、芥川の(わたし)が自己のマージナルな存在性を主題化し、これとむきあう舞台となつたのではなかったか。

*

けれども、興味ぶかいは、こうしたテキスト産出の場においても、マージナルな「主体(わたし)」がそうやすやすと克服され、芥川という個から立ち去るわけではなかったことである。一九一五年一月三日の井川宛書簡は、さきのあらたな(わたし)の誕生を宣言したその文言につづいて、

○唯僕の意識の中にはある暗い眼が浮んでゐる。何度もそれが泣くのを見た眼である。僕はこの心もちを失ふのを恐れる。この眼を失ふのを

恐れる かなしいやうな気もする

とむすばれる。この「眼」は、前稿にもひいた一九一一年（推定）山本喜
 誉司宛書簡（書簡番号73）に、

○レルモントフは「自分には魂が二つある、一は始終働いてゐるが、一
 つは其働くのを観察し又は批評してゐる」といつた。僕も自己が二つ
 あるやうな気がしてならない、さうして一つの自己はもう一つの自己
 を、絶えず冷笑し侮辱してゐるんだもの（…中略…）其相搏つてゐる
 大きな二つの力の何れかゞ無くつてくれ、ばい。さうしなければい
 つも不安である、かうまで思弱るほど意気地のない人間なんだもの。

とある、その「もう一つの自己を、絶えず冷笑し侮辱してゐる」「一つの
 自己」の眼であろう。そしてさらにいえば、それは、『合本三太郎の日記』
 第式「形影の問答」において、「自己の空疎」のみたされた「本当の生活」
 をカント流の「普遍的自我」（「他者の言葉」）への志向のうちにみい
 だそうとしていた三太郎に対して、そうした志向は「誠実な、敬虔な、鋭
 敏な感覚」の喪失、あるいは「待ち切れなくなつた」「一足飛び」なので
 はないかと糾弾した、あのもう一人の三太郎の眼でもあろう。

一二月八日の井川宛葉書には、

○僕は匆忙して何物かに追はれてゐる僕自身を下等と思ふ つよい自己
 意識と同時につよいゼルプストクエレライ (Selbstglaube) 自己呵責、
 稿者補) を持つ僕自身をみぢめに思ふ さうして 社会と自然との圧
 迫を端的に感じつゝある僕自身の将来を不安に思ふ

とあり、さらに「鼻」脱稿三日後の一月二三日山本喜誉司宛書簡には次の
 ようにみえる。

○僕は時々人生を貫流し芸術を貫流する力の前に立つ事がある（立つた

と思ふとすぐ又その力を見失つてしまふが）そして其力を見失つた瞬
 間に僕は僕の周囲にある大きな暗黒と寂寥とに畏怖の念を禁ずる事が
 出来ない 僕が僕以外の人間の愛を欲するのはかう云ふ時である 其
 時僕は個性の障壁にすべてと絶縁された僕自身を見る 悠久なる時の
 流の上に恒河砂の一粒よりも小なる僕自身を見る 僕はかう云ふ時心
 から愛を求めるとしてまたかう云ふ時が僕には度度ある 僕はさび
 しい

これらにみいだされるのは、一九一一年ころの芥川の（わたし）そして三
 太郎と同様の、境界に彷徨するマジナルな（わたし）の相貌であろう。

境界での彷徨のさなかに、「信仰」をもって他者（「芸術」）に自己を
 同定し、他者（「トルストイ」）を内面化し、「人生を貫流し芸術を貫流す
 る力の前に立」ちつつ Personal study としてのテキスト産出の場を確保し
 ながらも、その「内的体験」のさなかなにおもつきまとう「暗い眼」のま
 えで、「その力を見失」い、「周囲にある大きな暗黒と寂寥とに畏怖の念を
 禁ずる事が出来」ず、「僕以外の人間の愛を欲する」主体（わたし）
 芥川という個において生成し形成されている「主体（わたし）」は、おそ
 らく、他者（「トルストイ」）を主体化し、「鼻」テキスト生成の言語過程
 において「一寸のすきもなく自分の弱点（「weakness」）を攻め」るべく遂行
 された「生活」「体験」のさなかにも、「意識の中に」「浮かんである」「あ
 る暗い眼」をまぬかれることができず、「他者の言葉」（「言説、ロマン
 ・ロラン」「トルストイ伝」の芸術家言説）の選択をためらい、他者の内
 面化と外部化とを両極とする線分上を往還しつつ彷徨している（わたし）
 としてある。

そして、そこでもとめられている「愛」は、

○僕は僕の意志を尊重する その故に他人の意志を尊重する 徹頭徹尾

問題は意志にあると思ふ

最後にもう一度明白に書き加へる オイセルリツヒ (auszerlich 外面的、稿者補) に僕は文ちやんがすぎである インネルリツヒ (innerlich 内面的、同) にはまだわからない さうしてそのインネルリツヒの問題を解決するものは半分以上文ちやんの意志 (乃至そのインテンジテ

ート (intensial 強度、同) にあると思ふ

(一九一五年二月三日 山本喜誓司宛書簡)

○ 兎に角 僕が文ちやんを貰ふか貰はないかと云ふ事は全く文ちやん次第で きまる事なのです (一九一六年八月二五日 塚本文宛書簡) からみて、他者による自己認容への願望、あるいはマージナルな自己をそのまま肯定し受容してくれる他者の希求といった心意、すなわち前掲今井のいう「他人の視線を病的なまでに求めて彷徨する」(「わたし」の心意、つまりはマージナルな「わたし」に噴出する「渴望」(= vanity) と無関係ではあるまい。もしそういうことができるなら、この、テキスト形成の間に継起的に生じている「連の」主体(「わたし」)の様態は、そのマージナル性において、やはり、かぎりなく「鼻」の内供ににているといわなければならぬ。

こうして「鼻」は、マージナルな(「わたし」)を生きつづける芥川の「主体」が、テキスト同様の、というよりテキストの「対他的な自己像の所有をめぐる「渴望」に苦しむマージナルな(「わたし」)の物語」それ自体を内供とともに「生活」「体験」するなかで形成されたものとおぼしく、それを通じて人間の存在性をさししめすものとなったのである。

● (わたし) の今昔

以上、「鼻」テキスト出来時とその前後、芥川という個に生成していた「主体(「わたし」)」を、新版岩波全集の書簡篇をもとにうかがってきた。いうまでもないことだが、このようなマージナルな(「わたし」)を生きつづけていた芥川の「主体」は、しかし自己を対象とする personal study によつてのみ「鼻」をうみだしたわけではない。かかる(「わたし」)が『今昔物語集』巻二八「池尾禅珍内供鼻語第二十」、正確には校註国文叢書『今昔物語下巻／古今著聞集』(博文館、一九一五年八月刊)所収の同話(新版岩波全集補注の指摘)と出会うことで、「鼻」はその誕生をみたのちにちがいない。

けれども一方、全集書簡篇には、

・一九一一年五月二〇日山本喜誓司宛葉書にみえる『枕草子』耽読

(全集補注に「芥川がこの頃、王朝ものの古典である『枕草子』を熟読していたことは、注目される」とある。)

・一九一二年八月二日藤岡蔵六宛書簡中の「如例静平な生活をしてゐる時に図書館へ行つて怪異と云ふ標題の目録をさがしてくる」

の記事もみいだされ、また、

・一九一三年七月一七日井川恭宛書簡中の「此頃剪燈新話だの金瓶梅だの古ぼけた本を少し読んだよ」

・同二日藤岡蔵六宛書簡中の「唯本はすこしよんだ よんだと云ふ中には古ぼけた虞初新話や剪燈新話や五才子書や金瓶梅のやうな小説が多い 横文字の本は殆よまなかつた」

のほか、

・同一九日浅野三千三宛書簡中の「小供の時分に三州奇談とか云ふ隨筆にて黒部川の水源には椰子が生えてゐるの白鬼女川の主と白醜人の池の主とは夫婦だのと云ふ事をよんでより」

・同年八月八日浅野三千三宛絵葉書中の「僕はこんな宝物をみるのが好きです 本物でも贗でもかまはない 唯其制作者か所持者が古ければ古い程いいのです 丁度古老の口から中世紀の伝説をきいてゐる様な気がするからです」

などもある。これらによれば、その読書傾向に説話類がおおきな位置を占めていたようだから、それ以前にすでに内供との出会いがあったのかも知れない。しかしもしそのような出会いがあったとしても、そこでも「鼻」は誕生しない。このテキストは、さまざまな他者との境界でのマージナルな「主体（わたし）」の生成のもと、対他的な自己像獲得への「渴望」から噴出する「自卑」を「弱点」とみなし、そのマージナルな存在性に「欠陥」をみとめ、これを相対化する（わたし）の生成をまつて、ようやく出現の契機をうる。そして、そうした（わたし）が、「芸術」への「信仰」のもと、トルストイなどの「大いなる先輩」（一九一五年四月二三日山本喜春司宛書簡）たちにはげまされつつ「自分の弱点を攻めていく」Personal studyを決意し、『今昔物語集』の内供との出会い、これをもとに仮構されたテキスト空間での内供との対話をとおして vanity の作用とむきあい、マージナルな自己の存在性をみつめていく、そうした「生活」「体験」を通じて出来したのであって、それ以外ではない。次稿以下でのべるように、「鼻」の位相が『今昔』のそれとことなるのはこれによる。

*

さて、こうして前稿以来、阿部、大杉、芥川に生成し形成されていた「主体（わたし）」をみわたしてきて、マージナルな（わたし）の相貌とその後様態また動態は、いくぶんみやすいものとなつたようにおもふ。そしてこれを、たとえばつぎのテキストにみとおされる（わたし）の相貌や様態とみくらべあわせるとき、それが近代所生というばかりでなかったことが

了解されるであろう。

筆を執れば物書かれ、楽器を取れば音たてんと思ふ。盃を取れば酒を思ひ、賽を取れば攤打たん事を思ふ。心はかならず事にふれて来る。

〔徒然草〕第一五七段

…虚空よく物を入る。われらが心に念々のほしきままに來たり浮かぶも、心といふものなきにやあらん。心に主あらましかば、胸のうちに、若干のことは入り來たらざらまし。

（第三五段）

これらは、さきの芥川の書簡にあつた「人間の性格と周囲とその他百般の事象に *emotions* される或瞬間と或不可思議な感情よ、情緒よ」とかわるところがない。それは、「心はかならず事にふれて来る」「心といふものなきにやあらん。心に主あらましかば、胸のうちに、若干のことは入り來たらざらまし」の文言が明瞭に示すように、自己同一的で自己完結的自足的な自律的構築物ではありえない「主体」、他者との境界で対他的被媒介的かつ継起的に生成する「主体」のあり様をいいあてたものといつてよからう。そしてこうした内省は、たとえば『大般涅槃經』などをうけて『往生要集』（中巻・大文五・第四止惡修善）がとく、

もし惑、心を覆ひて、通・別の対治を修せんと欲せしめずは、すべからくその意を知りて、常に心の師となるべし。心を師とせざれば。

（原漢文。岩波思想大系『源信』による。）

といった言述に前提とされていた、「心の師」となつたり「心を師」としたりする自律的な「主体」を、喪失あるいは断念する、もしくはうたがう（わたし）の形成と、おそらくはともにある。したがつてそれは、このテキストの成立にかかわつた兼好という個における「主体（わたし）」の、このような仏教言説との境界での、言説の内面化を逡巡し、断念し、もしくはそれへの不信をいだくにいたつた「内的体験」をもつたえる。

勿論、このテキストの全体がこのような（わたし）とともにあるというわけではない。

心は縁に引かれて移るものなれば、閑かならでは道は行じがたし。

（五八段）

世に従へば、心の、外の塵にうばはれて惑ひやすく、人に交はれば、言葉、よその聞きに従ひてきながら心にあらず。（…中略…）いまだまことの道を知らずとも、縁を離れて、身を閑かにし、事に与らずじて、心を安くせむこそ、しばらく楽しむとも言ひつべけれ。『生活、人事、伎能、学問等の諸縁をやめよ』とこそ、摩訶止観にも侍めれ。

（七五段）

さきにひいた一五九段の「心はかならず事にふれて来る」に対して、ここにひいた五八段には「心は縁に引かれて移る」とある。また、七五段に「外の塵にうばはれて惑ひやすく」「さながら心にあらず」とあるところにもあきらかなように、これらの言述においては、「心」は実体的自己同一的な存在物としてとらえられている。そして、「縁」にひかれる心を「他者の言葉」（『出家遁世言説、摩訶止観などの仏教言表』の内面化を通じて克服、超克すべきことをとく行文には、「心の師」（『自律的なわたし』）たるべき「心」への志向が、明瞭に示められているのである。

けれどもつぎの第九七段の言述は、あきらかにこれとはことなる（わたし）にかかわっている。

その物につきてその物を費やしそこなふ物、教を知らずあり。身に虱あり。家に鼠あり。国に賊あり。小人に財あり。君子に仁義あり。僧に法あり。

「仁義」「法」はそれぞれ儒教言説、仏教言説（『他者の言葉』）に内属する言表のことである。これらが「君子」や「僧」に付きてかれらをし

ばってこわばりをもたらし、やがてその「個」を損なうにいたると、ここでの（わたし）はいう。こうした「法」（『仏法』仏教言説）を「その物」につきてその物を費やしそこなふ物」と観ずる（わたし）は、仏教言説との境界で言説の内面化をはたす（わたし）とは別の、言説への疑念を内容とする「内的体験」のもとで形成された「主体（わたし）」にほかなるまい。そして、「他者の言葉」から身をひきはなす、かかる（わたし）が「心」なるもの、つまり自己像と直にむきあい、しかもなおこれをつかみかねているところで発せられるのが、「心はかならず事にふれて来る」「心といふものなきにやあらん。心に主あらましかば、胸のうちに、若干のことは入り来たらざらまし」といったことばなのであろう（『徒然草』にみる「主体」の変転については「多言語世界と秩序」『日本文学』44—7、一九九五年）に詳述した）。

他者としての言説との境界で言説の内面化を逡巡、断念し、疑念をもち13だきつつ、宙吊りのまま自己像をつかみあぐね、自己所有の欲望の不充足をまめに空虚感だけをかかえもつてたちつくしている（わたし）。この（わたし）に、前稿で確認した、「他者の言葉」の内面化を警戒して自問自答をくりかえしていた三太郎や大杉栄、芥川らの（わたし）、あるいは本稿でこれまでみてきた「鼻」テキスト出来時の芥川の（わたし）との相同性をみるのはそうむづかしいことではあるまい。他者あるいは「他者の言葉」（『言説』）との境界で宙吊りになっているマジナルな（わたし）の肖像は、こうして古典テキスト中の「主体（わたし）」のものでもあったのである。

*

ただし、このようなマジナルな（わたし）の肖像は、言説との境界でその内面化を逡巡しているすがたにたしかめられるばかりではない。「心

は縁に引かれて移るものなれば、閑かならでは道は行じがたし」(五八段)「世に従へば、心の、外の塵にうばはれて惑ひやすく、人に交はれば、言葉、よその聞きに従ひてさながら心にあらず。」(七五段)と観ずる(わたし)は、やがて、他者の言葉を内面化しそこに同定される(わたし)であるとしても、被媒介的継起的な「心」なるものの生をまえにその存在性にとまどっている(わたし)として、やはりマージナルな相貌をかいまみせている。そして、そのマージナルな(わたし)が言説の内面化によっても排除されず、なお「ある暗い眼」をたもっているところに、さきの一五七段や二三五段も生成するのだろう。この間の事情は、さきにみた「鼻」テキスト形成時の芥川の「主体(わたし)」の様態、すなわち、「芸術」への「信仰」のもとトルストイに媒介されてテキスト生成の場を確保し、マージナルな自己像の personal study をこころみる(わたし)としてたちらわれながら、しかし「意識の中に」「浮かんである」「ある暗い眼」にみいられて「其力を見失つた瞬間に」、やがてまたそれ以前の「僕は僕の周囲にある大きな暗黒と寂寥とに畏怖の念を禁ずる事が出来ない」マージナルな(わたし)に回帰していったこと、これを想起すればすでにあきらかであろう。

他者あるいは「他者の言葉」を内面化した(わたし)生成の前段にあつて、その(わたし)の生成後もなおいきつづけやがて回帰をはたすマージナルな(わたし)。そうした(わたし)の古典テキストにおける様態は、たとえば、さきの『往生要集』の要文「心の師とは成るとも心を師とする事なかれ」をつぶやきながら発心機縁の事例を集積していった『発心集』形成時の(わたし)にもみとめうる。そこでの長明の(わたし)は、『往生要集』の要文への同化を志向しながらも、一方で、御しがたい「荒れたる駒」のごとき心、「風の前の草のなびきやすきが如く」浪の上の月の

静まりがたきに似「たる「愚かなる心」をみつめる(わたし)」としてもあり、一々の話題との対話の具体を記す話末評論にその御しがたい「心」をみつづけているのである。また、『方丈記』にみるごとき、王朝遁世言説を内面化して「草庵の榮華」を謳歌し「個」の居場所の確保をほこらしげにかたりながらも、「仏の教へ給ふ趣は、事にふれて執心なかれとなり」と仏教言説を想起するや「今、草庵を愛するも、閑寂に着するも、障りなるべし」と内省におよび、そこにやすんじえない自己をかかえて「ただ、かたはらに舌根をやとひて、不請阿弥陀仏、兩三遍申してやみぬ」る、いわば言説間の境界で身うごきもとれずにうずくまっている(わたし)のすがたにも、同様のマージナルな(わたし)の相貌は確認できる。

ところで、こうした確認は、「他者の言葉」(≡諸言説)の内面化をより強固にはたしているかのごとくみえる古典テキストをまえに、言説の意味的側面(価値像、世界観)もの見方・考え方)やその母胎としての共14同体の解明、あるいはその内面化の度合いを尺度とするテキストの表現性一批評をくりかえしてきた古典の研究に、あるいは教育に、再考をせまるとまではいわぬにしても、それとはことなる視角がありえたことを示唆していよう。小論が関心をよせる説話テキストの場合も、表層の言説意味性にもとづいて仏教説話、神祇説話、靈驗譚、教訓譚、歌徳譚、故実説話等々と分類されることがおおいが、そこで問題にされているのは、説話テキストの産出にかかわった「主体(わたし)」において内面化が志向されている「他者の言葉」(≡言説)のジャンル性にはかならない。けれども、たとえばその表層の言説ジャンルにもとづいて発心機縁の事例を集めた仏教説話集とみなされてきた『発心集』は、いままたように、実のところ、「御しがたい「荒れたる駒」のごとき心」をもって彷徨するマージナルな(わたし)の「内的体験」の所産としてある。そして、テキストの生成は、

宙吊りの位置にあって「自己の空疎」を補填すべく結縁のための発心譚（Ⅱ「他者の言葉」）をもとめその内面化を志向しながらも、「他者の言葉」（Ⅱ「話題あるいはこれにかかわる言説」）との境界であらたに「主体」を生成し、そこでの「内的体験」を通じて自己と他者（Ⅱ「話題、言説」）そしてそれらをつくめた世界の全体とあらためてむきあう、その出来事性、行為性とともにある。したがって、このテキストの表現性は、内面化の志向された他者あるいは「他者の言葉」のジャンル性を問題にしただけでは不十分で、説話テキスト出来の舞台においてたしかに演じられている、他者あるいは「他者の言葉」をまえにした「主体（わたし）」の生成とその「内的体験」のドラマをとわないかぎり論ずることができないということになろう。おそらくこうしたドラマは、個々の説話テキストの生成過程においてそれぞれのかたちで演じられていることとしてある。それゆえ説話集は、そのような「主体（わたし）」の生成とその内生のドラマの点綴、すなわち、それぞれの話題との境界で被媒介的継起的に出来した（わたし）の変転と、そうしたさまざまな（わたし）の対他的な「内的体験」を介して構成し所有された「自己自身」なるものや、他者像および世界像の履歴をささむものとしてあるといつてよく、その「主体（わたし）」の変転と、「内的体験」の履歴のあり様こそがテキストの表現性の顕現する場所といわれるべきであろう。

*

さてこうしてみると、他者との境界で宙吊りになっているマジナルな（わたし）は、これが他者との境界で被媒介的継的に生成する「主体（わたし）」の原像をしめすものとしてあることからしても当然のことだが、古典テキストにもその肖像がみいだされ、しかも言述行為の基底に根ぶかく棲息しているものとしてあったことがたしかめられよう。

しかしこうした（わたし）は、前々稿にひいた丸山眞男の発言がそうであったように、戦後の民主化という近代化称揚の季節のなかで「日本の「文学的」思考様式」にねがず非社会的脱社会的な「主体」として特殊化され排除され（Ⅱ「否定的同質性」）、「反社会的でもありうる自律的な」主体性の正統化のもくろみのまえに否定的にしかあつかわれてこなかったようにおもう。そしてそのもつとで、われわれは、みずから（もしくは教育を通じて）「自律的な」主体「親を内面化し、近代所生の自律的な」主体「像を古典および近代のテキストにもおいてもとめてきたようにおもう。たとえば、さきにひいた「：虚空よく物を入る。：」の文章のふくまれる『徒然草』第二三五段が、

主人のいない家のように、主体のない人間が、いかに他の所有になりがちであるか。自己を確立することによって、他の所有から自己を回復する。そこに初めて本来の自由が獲得される。卑近な例をあげながら、きわめて説得的に兼好の思想が展開されると言えよう。

（小学館日本古典文学全集、頭注。新編も同）
と評されるなどは、その端的な例であろう。ここに開陳されるのは「兼好の思想」ではなく、自律的な「主体」親を内面化した校注者の思想にほかならない。

けれども、自律的な「主体性」をめぐる「他者の言葉」の内面化をもつてなった「鼻」の批評テキストが、すでにして評者たちの「自己の空疎」を補填しようとした「一足飛び」（前掲、阿部「形影の問答」）以外ではなく、それゆえ評者たちもまた宙吊りの（わたし）を生きていたというほかないことにあきらかなように、また古典テキストにも同様の（わたし）の肖像が確認されたように、他者との境界で宙吊りになって彷徨している（わたし）は、やはり存在性（Ⅱ「存在すること」）の原風景、言述の基底もし

くは起点をさししめずものといわれなければならない。その意味で、表現性へのといかけは、古典テキストをもふくめたテキスト一般の生成をそうした「主体(わたし)」の存在性においていとなまれている言語行為の所産としてみ、マージナルな(わたし)の変転、「内的体験」の履歴の一々をといなおすところからはじめられる必要がある(こうした立場からの拙稿に前掲「多言語世界と秩序」、「枕草子の言述」(論考 平安王朝の文学——一条朝の前と後)新典社、一九九八年)、また武久康高「雅言説と『枕草子』——『枕草子』の言説空間——(中国四国教育学会『教育学研究紀要』第44巻第二部、一九九九年三月がある)。そしてそのためには、自律的な(わたし)が「他者の言葉」への「一足飛び」によるものでしかないことをそれとしてとらえかえし、テキストとむきあうわれわれ自身が自律的「主体」観の幻覚からめざめ、みずからが他者との境界で被媒介的かつ継起的に生成している「主体(わたし)」としてあり、マージナルな存在性をいきつつ、たえずそこで対他的な「内的体験」あるいは「他者の言葉」を介して「自己自身」を、他者像を、さらには世界像を構成しなおしている、いいかえれば、「三太郎や「鼻」の内供、「鼻」成立前後の芥川の(わたし)同様、自己像をむすべないまま境界線上を彷徨している「主体(わたし)」としてあることを、ただしく認知することがもとめられていよう。

他者あるいは「他者の言葉」との境界の宙吊りの位置。そこはしかし、被媒介的継起的な「主体(わたし)」の存在性の確認をとおして、個がみずからの存在と世界の無根拠性をつきつけられる場所でもある。その意味で、テキスト生成の間の「主体(わたし)」の変転、「内的体験」の履歴をといつつすめられる読書は、そうした変転と履歴をかさねつつ宙吊りのままテキストをさまよっているマージナルな(わたし)の確認を通じて、

読者自身のみずからの非在性とむきあいつづけることでもある。『今昔物語集』話をまにこれと対話し、テキスト空間でマージナルな(わたし)を内供とともにいきつづけた芥川もまた、このような苛酷な時間をテキスト産出の場の「内的体験」としてすごしたのであるが、漱石が「鼻」によせた批評は、内供のむこうにすけてみえる、こうした芥川の(わたし)の「内的体験」の全体への、あるいは Personal study にむけてこうした(わたし)の「内的体験」の全体をテキスト空間で「生活」「体験」してみせた芥川という個への、慰撫とはげましの情をこめたことばでもあったようにおもう。

*

『或阿呆の一生』「十 先生」(第16巻)にはつぎの短文がみえる。

彼は大きい榎の木の下で先生の本を読んでいた。榎の木は秋の日の光の中に一枚の葉さへ動かさなかつた。どこか遠い空中に硝子の皿を垂れた秤が一つ、丁度平衡を保つてゐる。——彼は先生の本を読みながら、かう云ふ光景を感じてゐた。……

これにつづく「十一 夜明け」末尾には「それは彼の二十五の年、——先生に会つた三月目だつた」とある。芥川が漱石の門に入ったのは、「芥川龍之介年譜」(第12巻。初出、一九二五年四月刊『現代小説全集』1巻末)によれば「鼻」執筆中の一九一五年の二月のこと、そして漱石が芥川に「鼻」読後感をしたためた書簡をおくつたのはその翌年、芥川二五歳の二月一九日で、「先生に会つた三月目だつた」。「どこか遠い空中に硝子の皿を垂れた秤が一つ、丁度平衡を保つてゐる」とは、マージナルな(わたし)がその期待の地平にみた幻影でもあつたらうか。(未完)